

論文

フォーク・ロア、フォーク・カルチャー、フォーク・ライフ： 中国における民俗学教科書の「物質文化」の捉え方

余 瑋

YU Wei

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 中国民俗学界において「物質文化研究」を指す際に用いられる「物質民俗」の用語は、後藤興善著『民俗学入門』（1950）の1984年の中国語訳をきっかけに中国に導入され、陶立璠著『民俗学概論』（1987）によって普及し始めた。同書は主に「居住」「服飾」「飲食」「生産」「交通」をめぐって「物質民俗」を論じた。一方で、1989年に「民俗文化学」を提唱した鍾敬文は編著『民俗学概論』所収の「民間工芸技術」「民間工芸美術」中で物質文化に注目した。

他方、スカンジナビアから始まった「Folkliv」研究の影響を受けたアメリカ民俗学界では、1960年代からフォークロアからフォークライフへと転換を行い、この変動は教科書にも反映された。フォークライフに対応する研究項目は、1993年の中国語訳によって「物質民間伝統」「物質民俗」の二つの用語に包含されたほか、2002年にアメリカ民俗学の分類を参照しながら中国では「物質民俗学」の枠組みが創出された。

このように、本稿は教科書を切口にして、「フォークロア」「フォークカルチャー」「フォークライフ」の差異変動から物質文化を対象化する民俗学史を紐解いた。物質文化の捉え方には、「民俗学」への認識変化が投影され、「民俗とは何か」という問いをめぐる論争を繰り広げることによって、物質文化への注目は徐々に喚起されていったと考えられる。

今回の分析によって、これまでの中国民俗学の研究において無批判に用いられてきた「物質民俗」という用語はそれぞれの段階で再構成してきたが、民俗学教科書における物質文化の捉え方は表層的であることを明らかにした。加えて、物質民俗学を唱えながら独特な研究は少ない現状にある中国民俗学界の物質文化研究の研究動向も確認する。

Folklore, Folk Culture, and Folklife : How China's Folklore Textbooks Treat Material Culture

Abstract : The term “material folklore,” which refers to the study of material culture in the Chinese folklore community, was first introduced to China in 1984 with the translation of the 1950 book, “Minzokugaku Nyumon (Introduction to Folklore),” by Kozen Goto. It later came into circulation through “Minsuxue Gailun (Introduction to Folklore),” a 1987 book by Tao Lifan in which he discussed material folklore with respect to housing, clothes, foods, production, and transportation. Meanwhile, Zhong Jing-wen, who advocated the concept of folk culture studies in China in 1989, turned the spotlight on material culture in “Folk Crafts Skills” and “Folk Arts and Crafts,” two articles found in the “Minsuxue Gailun (Introduction to Folklore),” a book he edited.

American folklorists influenced by the study of “Folkliv” originating in Scandinavia began to replace folklore with the term “folklife” in the 1960s. This shift was also reflected in textbooks. In China, the subjects of research covered in folklife studies were grouped into two terms translated into Chinese in 1993 as “material folk tradition” and “material folklore,” and in 2002, a framework for the study of material folklore was created using the classifications of American folklore studies as a guide.

As described above, this paper uses textbooks as an entry point to historically examine how folklore studies have gradually taken material culture as an object of study through the changing terminologies of folklore, folk culture and folklife. The shifting awareness about folklore studies reflects the different ways material culture is perceived. Interest in material culture gradually took hold as discussions on the question of “What is folklore?” became widespread.

The term material folklore, used without critical reflection in Chinese folklore research, has been redefined at various stages of history, but the analysis of this paper shows that the ways material culture is perceived in folklore textbooks are superficial. In addition, the paper discusses the trends of material culture research by the Chinese folklore community, which at present conducts little distinct research despite advocating for the study of material folklore.

はじめに

本稿では、近現代中国の大学における民俗学教育で用いられる教科書において、「物質文化」がどのように捉えられてきたかを示し、中国民俗学における「物質文化」研究を学史的に明らかにすることを目的としている。本稿で取り上げる教科書とは、主に大学で民俗学的教育を行うために用いられるものである。⁽¹⁾

「教科書」という用語は1887年から中国に紹介された後、近現代教育に関わる専門的な術語になっていた⁽²⁾（呉小欧 2020）。教科書は各種のイデオロギーの操練場であり、また、別の局面では、学問の制度化に伴う一つの所産でもある。教科書の編纂はこの学問の将来への布石と見なすことができるほか、編纂の仕事により、一つの学問分野の枠が形成され学術研究の規定も設けられた。言い換えれば、教科書は学問の体系や境界を示している。

そして、学問の「再生産」の手段と見なされる教科書は、二重のアボリアに直面しなければならなかった。教科書を編纂する過程において、枠組み内に収める内容を決める一方、排除されていくものも自然に現れる。すなわち、研究の埒外に追いやられたこと、不在とされるものである。さらに、編纂された時期、編纂者によって、収録内容や範囲、力点を置くところも異なる。その意味では、教科書は単に、概念上のものにとどまらず、分析道具にもなりうる。

編まれた教科書の中には、一つの学問に対する認識の変化、ないし種々の問題に直面する研究者たちの葛藤が隠されている。また、教科書の内容の変遷は、学問の進展状況も当然反映されている。このような、知の特定の表現形式である教科書は、知の変化を追跡する手がかりとなるものである。

以上のことを踏まえて、学史的な検討を行う際に、教科書は看過できない資料であろう。

とはいえ、中国では、これまでの民俗学教科書についての研究は少ない状況である。教科書の構成や特徴、制作経緯、編纂方法、教育現場の効果などを取り上げ、通説的、比較的、批判的に論じていた文献も存在する（施 2004、王晓葵 2006、喬・李 2013、林・張 2017）が、基本的には、教科書の具体的な内容がカッコに入れられ、検討を行った。

これまでの中国民俗学界では物質文化に関する研究が少ないことはなぜなのかということを問題にする場合、民俗学徒の養成に関連する、アカデミック制度の定着の補助輪としての教科書をめぐる検証は欠かせない。そのほか、「物質文化」という用語の不透明さゆえに、その概念を具体的なコンテキストに置かなければ検討を展開しがたい。さらに、前述のアポリアから導かれた流動的な見方によって、物質文化をどのように捉えてきたのかをより明晰に示すことができる。

そのため、本稿では、中国における民俗学教科書を資料として、物質文化の捉え方に焦点を合わせ、「フォーク・ロア」「フォーク・カルチャー」「フォーク・ライフ」という学問の境界変動から中国民俗学における物質文化研究の位置づけを読み解こうとする試みである。

尚、本論で引用する中国語文献は全て筆者の翻訳による。以下、中国民俗学と教科書の関連について概観に触れながら簡単に論じていきたい。

I 中国民俗学と教科書

(1) 翻訳から編著へ

1920年代後半、中国民俗学の主力が北京大学から中山大学に移行してまもなく、中山大学を拠点として機関誌『民間文芸』（第1期 1927年11月1日週刊）が創刊された。その後、民俗学会も創設された。

第13期から『民俗』（週刊）に改題されたこの機関誌において、「中国民俗学運動」の具体的な成果を確認することもできるようになった。民俗学会の「外国民俗学の参考書を購入する」などの方針にしたがって、西洋における民俗学の名称や関連する学説の紹介などの文章が何本か掲載されている⁽⁴⁾。その中でよく知られるのは、楊成志が翻訳したシャーロット・ソフィア・バーン（Charlotte Sophia Burne）の編著『The Handbook of Folklore』（楊成志⁽⁵⁾ 1928）、何思敬がイギリス民俗学界を中心に検討したもの（何 1928）などである。

1928年3月21日に創刊号を発刊した『民俗』（週刊）は、第110期で休刊、3年後の1933年春復刊し、第123期まで続いていたが、1933年6月30日にまた休刊になった。1936年9月、楊成志の主宰で週刊から季刊へ転換し、1943年12月まで7年の間、8期を刊行した後停刊した⁽⁶⁾。この間も民族学、文化人類学、宗教学に関する研究や学者の紹介などの訳文を掲載した。そのほか、当時の中国における「民俗学」への歴史的認識の不足を補うため、外国の民俗学史の紹介文も載せられた。

他方、その時期には、中国国内の民俗学の教科書も編纂されていた。代表的なのは、バーン編著『民俗学概論』に基づき書かれた林恵祥⁽⁷⁾『民俗学』（林 1931）と方紀生『民俗学概論』（方 1934）の両書である。

(2) 中国民俗学の制度化とアカデミック教育

前述した機関誌『民俗』(週刊)においては、「民間文学」関連の記事が膨大であり、当時の中国民俗学界の一側面を反映している。しかし、楊成志主催の『民俗』(季刊)の場合は、「民俗誌、民俗学及び民族誌、民族学の機関誌」(鍾 1943)という趣旨の通り、「民間文学」の記事は減少した。

ところが、日中戦争を経て、また解放を実現した中国において、民俗学はブルジョアの学問と見なされ、冷眼視された。その時期には、少数民族をめぐり「社会歴史調査」⁽⁸⁾が大々的に行われたが、主な参加者は、歴史学者、民族学者、言語学者、行政官員であり、また、資料の扱いも民俗学とは異なるものだった(鍾 2002)。その一方、民間文学は「労働人民の口頭創作である」と目されるため重視されていた(鍾 2002)。1950年3月29日、中国民間文芸研究会⁽⁹⁾が成立し、1955年4月に『民間文学』(月刊)も創刊された。

ちなみに、1956年冬、楊成志が「中国民俗学12年遠景規劃」を起草し、潘光旦、呉文藻と連名で、中華人民共和国国務院に提出した。その計画案では、国の社会主義文化建設における民俗学の重要性を強調するほか、研究範囲も広げて、いわゆる文学の枠を超え「衣食住行」へ目を向けること、また民間の音楽、絵画、彫塑、舞蹈、遊戯なども研究範囲に含めると書かれた。だが、潘光旦と呉文藻は社会学者であることと、当時の中国社会の雰囲気から考えると、このような動きも一時的なものにとどまった⁽¹⁰⁾。

その後、文化大革命を迎えて、民俗学の研究も停滞を余儀なくされた。当時の中国民俗学界における代表的な研究機関「中国民間文芸研究会」(現・中国民間文芸家協会)⁽¹¹⁾の活動も停止し、機関誌『民間文学』は1966年から1978年までの間休刊になり、大学での民間文学の授業も中止された⁽¹²⁾。

文化大革命の終焉に伴い、1978年夏、7人の教授(顧頤剛、白寿彝、容肇祖、楊堃、楊成志、羅志平、鍾敬文)⁽¹³⁾が連名で「民俗学の建立及び関連する機関についての提議書(建立民俗学及有关研究機構的唱議書)」という建白書を出した後、さまざまな関係者の尽力によって、1979年11月1日、中国文学芸術工作者第四回代表大会、及び中国民間文学工作者第二回代表大会で、民俗学に関する研究機関の成立が認められ、年末に、中国民間文芸研究会内に「民俗学研究部」を設立した。1983年5月21日、ようやく、北京において中国民俗学会が成立した。⁽¹⁴⁾

①「学科」としての中国現代民俗学

このような流れに沿って、後継者の養成も重視されるようになり、大学における民俗学教育の準備も次第に整えられていった。

1953年に鍾敬文は北京師範大学の中国語文学系で民間文学の専攻の大学院生を募集し始め、1955年に、北京師範大学に全国初の「民間文学教研室」が成立した。しかし、国レベルの規定により、「民間文学」が一つの「学科」として認められるのは1983年のことである。

中国における学位は、1981年1月1日施行の「中華人民共和国学位条例」により、学士、碩士、博士の三つのレベルに分けられ、また同年5月20日に批准された「中華人民共和国学位条例暫行実施弁法」により、哲学・経済学・法学・教育学・文学・歴史学・理学・工学・農学・医学の分野ごとに授与されることになった。それらの分野の下に、具体的な学科や専攻の区分は1983年3月に公布された「高等学校和科研機構授予博士和碩士学位的学科專業目錄(試行草案)」の中に示された。

これによると、文学の分野に「中国語文学」という「1級学科」が設置され、その下に「中国民間文学」という「2級学科」が置かれた。それに対し、「民俗学」は学位を授与する専攻として認められなかった。⁽¹⁵⁾ 1997年6月の新しい調整によって、民俗学は「法学」の分野に属する「社会学」という「1級学科」の下に置かれた「2級学科」に指定され、「民俗学（含：民間文学）」となり、現在まで維持されている。⁽¹⁶⁾

②アカデミック教育と教科書のニーズ

一方、上記のように、大学の教育を推進する間に、教科書の需要も高まっていた。

1978年6月、中国教育部は、文科教材の空白を埋めるため「1978-1985年高等学校文科教材編選規劃」を制定した。そして、同年9月1日、北京師範大学中国語文学系は全国における民間文学の教育推進及び教師の育成、民間文学教材の編纂を目的として、「民間文学進修班」の開催申請書を教育部に提出した。翌年2月から、鍾敬文の主宰によりこの「進修班」が開催され、『民間文学概論』（鍾1980）の編纂もその頃から始まった。

さらに、1979年7月、北京師範大学での「全国暑期民間文学講習班」、1983年7月20日中央民族大学での「第一回全国民俗学及び少数民族文学講習班」、1987年9月25日北京門頭溝民俗博物館での「第二回民俗学講習班」などの開催により、教師の育成とともに各大学を拠点とする民俗学教育も進んで、地方の民俗学会も相次いで成立してきた。このような流れにのって、教科書や概論書も次々に出版された。⁽¹⁷⁾

それとともに、外国教科書への参照、あるいは翻訳も重視された。1980年代中後期から中国民俗学界の機関誌に北米の大学における民俗学に関する課程設置の状況や、カリキュラム、教科書を紹介する文章が掲載された（王熾文1988、董学芸1991）。また、同時期に、日本民俗学の概論書やアメリカ民俗学教科書の翻訳などの動きも模索された。

II 見えにくい「フォークロア」と「物質文化」の関連

前述したような背景を踏まえて、ここでは、1934年の教科書『民俗学概論』（方1934）から本題に入りたい。

この教科書は中国民俗学界においてある程度認識されているが、編著者の方紀生（1908-1983）についてはよく知られていない。

彼は1908年8月広東省普寧県に生まれ、1931年7月北平中国大学の経済学部を卒業した後、日本の明治大学に留学し政治学を専攻した（姜1992：990、川辺・鳥谷2019）。彼は留学する前から周作人⁽¹⁸⁾、顧頡剛⁽¹⁹⁾、許地山などの影響を受けたため、明治大学の民俗学に関する授業に参加した。⁽²⁰⁾ 日本の民俗学を学んでいるうちに、日本民俗学者との交流を持った。1934年に入り、方紀生は帰国し華北大学（現・中国人民大学）に勤めて、「民俗学」という授業を開講した。講義のために編集されたのがこの『民俗学概論』である。

この本は、学生たちに配られたほか、顧頡剛も寄贈を受けた。1980年代に入り、顧頡剛が所蔵していた同書が当時北京師範大学教授だった白寿彝に発見され、北京師範大学史学研究所資料室により

あらためて校正を加えられ、再印刷された（姜 1992：990、川辺・鳥谷 2019）。再印刷された本の「校印題記」で、この本は「我が国において最も早く民俗学に関する系統的な論述を行うものである」と位置づけられた。

では、この本には一体どのような内容が書かれていたのか。

本書は、民俗学の定義とその学問範囲の規定から始まる。内容としては、シャーロット・ソフィア・バーン（Charlotte Sophia Burne）⁽²¹⁾編著『The Handbook of Folklore』からの引用が多い。目次を一見すれば分かる通り（表 1 参照）、本書はバーンの分類に従いながら民俗学の解説をしたものである。

表 1 方紀生編著『民俗学概論』1934 年（目次表）

第一章 序論	第一節 民俗学定義と範囲	
	第二節 民俗の分類	
	第三節 民俗学の効用	
	第四節 民俗学研究の方法	
	第五節 民俗学の歴史	
	第六節 民俗学の派別及最近の趨勢	
第二章 信仰	第一節 原始人思想の特徴	
	第二節 天地及日月	
	第三節 植物	
	第四節 動物	
	第五節 人類	
	第六節 人工物	
	第七節 靈魂及第二世界	
	第八節 神及崇拜方法	
	第九節 精霊怪物及小妖	
	第十節 予兆と占ト	
	第十一節 魔術	
	第十二節 民間医薬	
	第十三節 性的崇拜	
第三章 習慣	第一節 社会的制度	
	第二節 政治的制度	
	第三節 個人生活の諸儀式	第一項 誕生の儀式
		第二項 成年の儀式
		第三項 結婚の儀式
		第四項 葬喪の儀式
	第四節 職業と工芸	
	第五節 暦及斎節日	
	第六節 競技遊戲及跳舞	
第四章 故事歌謡及成語	第一節 民間文芸の特徴	
	第二節 故事	
	第三節 歌謡	
	第四節 諺語と謎語	
	第五節 習慣的韻語及地方俗語	
付録一：北京大学研究所国文学門風俗調査表		
付録二：民族文化調査問題格		
付録三：中国婚俗調査問題格		

このような本の構成案は、方紀生の個人的な研究志向を含んでいるだけではなく、バーンが提唱した民俗学の研究対象（「民間の心的方面の装備をなす凡べての事項を包含するものであって、民間の工藝的技倆とは区別」され、「鋤の形式ではなくて、耕作者が、鋤を土中に入れる際に執り行う儀式であり、網や鉈の製作ではなくて、海に出た漁夫の遵守する禁忌（Taboo）であり、又橋梁や住宅の建築術ではなく、その建築に伴ふ供儀並びに其れ等を使用する人々の社会生活」であるもの）、すなわち、「其の何れを問はず凡べての方面に於ける未開人心理の表現」である（バーン 1927：3-4）

という捉え方が、当時の中国民俗学界に強く影響を与えたことも反映している。⁽²²⁾

ただ、注意したいのは、方紀生の概論書の第六節「民俗学的派別及最近趨勢」の中に、以下のよう
に書かれていることである。

最近の民俗学界の研究動向は、早い段階から排除された民衆美術及び民衆技芸をすべて民俗の範
囲に入れており、そうすると、郷農の物質的及び知識的文化もすべて含まれている（方 1980：
9）。⁽²³⁾

そして、この話の次に、方紀生はバーンの後任としてイギリス民俗学会会長を務めたライト
（Arthur Rorbertson Wright）の就任講演文（1927 年 2 月 16 日）を引用し、民俗学は「過去」だけ
ではなく「現在」とも向き合うべきであるという理由から、民衆美術も研究の俎上に載せてきたと述
べた。

ライトの講演文は、そのテーマ「The Folklore of the Past and Present」が示したように、当時の
イギリスにおける「過去」に束縛された民俗学の研究対象の狭さを批判したものだ。その講演で
は、彼が当時のイギリスの「Folklore」の研究を「Folk Literature」に限定することに対して異議を
唱えた。その上で、彼は、他国の「Folklore」の定義と比較し、イギリス民俗学においても、その研
究対象を拡大すべきだと強調した（Wright 1927）。とりわけ、ジェネップ（Arnold Van Gennep）の
分類案（ジェネップ 1932）の中には「家屋、用具、服装、民間芸術」⁽²⁴⁾までが含まれていると指摘し
た。

言うまでもなく、「民俗」は単純に「過去」の産物であるのか、あるいは「現在」を映すものなの
か、についての検討はきわめて重要であり、現時点で考えても、一つの方法論的転換を意味してい
る。しかしながら、「時間軸」からの解放にとどまらず、研究範囲は物質文化を含め、「Folk Life」
を捉えられるように拡大するという点は、方紀生の教科書では、言明していなかった。ライトの講演
文の中に現れた物質文化への関心を方紀生が等閑視したといえる。

ところが、1956 年 3 月、セイイス（Roderick Urwick Sayce）⁽²⁵⁾というウェールズ民俗学者はイギリス
民俗学会（Folk-lore Society）の会議で同僚たちに物質文化への注意を喚起するため、自分の発表の
中でライトのこの演説文を引用した（Sayce 1956）。

さらに付言すれば、中国では、ライトの演説文は、江紹原という学者により要旨をまとめた抄訳が
発表され、1932 年に一冊の本の付録として出版された（瑞愛徳 1988：191-206）。江紹原は、同書
の中で、イギリス民俗学の「古い」定義を反省しながら、ドイツ（Volkskunde）の定義を説明した
上、「心理的」な面、「精神文化」のほか、「実生活」、物質文化への着目が必要であると強調した。当
時の中国民俗学界に「民間故事」は「民俗学」ではないという異議を提出した彼は、「民俗学」の代
わりに「民学」という名称を提唱した（江 1988：242-278、280-328）⁽²⁷⁾が広まらなかった。

では、仮に、バーンによる民俗学の研究対象は、「伝統的な文化の残存であり、その範囲を観念的
領域に限定している」（岩田 2021：191）と認識すれば、方紀生の教科書はこの「呪縛」にまだとら
われていたと考えられる。本書の第二章の第六節は「人工物」（Things made by Man）と題したが、
この中にも、予兆や憑依の信仰に関する話が中心であった。要するに、方紀生の教科書には「ア

ーツ」「クラフツ」への注目というイギリス民俗学界における新しい転換に言及しても、物質文化への自覚はまだ現れていなかった。

Ⅲ 導入された「物質民俗」と「民具」

前述したように、1930年代、中国民俗学界では諸国の民俗学の動きに目を配り、速やかに国内に翻訳・紹介するように努める傾向があった。その頃、学者たちの間には、バーンによる民俗学の概念の狭さを意識した人もいた（鍾 1983）。ただ、そうした反省は当時の教科書編纂に生かされることはなかった。1980年代に入り、教科書の編纂に専念する中国民俗学者たちの間では、バーンのような高名な学者らの見方を批判しながら自らの定義や分類案を提議することが主流になった。そこで、次に取り上げ論じたいのは、ちょうどこの時期に出版された教科書、陶立璠『民俗学概論』（陶 1987）である。この本が注目に価する点として、まず「物質民俗」という用語を採用していることである。

本書の第二章第三節「民俗的分类」では、イギリスのゴム（George Laurence Gomme）とバーン（Charlotte Sophia Burne）、フランスのセビオ（Paul Sébillot）の分類を評論した後、フランスのサンティエヴ（Pierre Saintyves）の「物質生活」「精神生活」「社会生活」という分類を評価した。そして、柳田国男の分類（「習慣（生活技術）」「口碑（語言芸術）」「感情、觀念、⁽²⁸⁾信仰」と、後藤興善の分類（「有形物質民俗」「社会集团民俗」「口承語言民俗」「無形心意民俗」）に触れている。

ここでは、「有形物質民俗」という用語に注目したい。後藤著の第六章は「有形物質民俗」と題されているが、明確な分類は行われていなかった。「以下調査を目標にした物質生活の民俗を略述しよう」（後藤 1950：72）と書いた後、「村、家、衣服、食物、農業、漁業、林業・炭焼・狩猟、民間工芸、民俗芸術、交易、交通⁽²⁹⁾」の項目を挙げながら、調査要点を説明し、最後に、「庶民の有形物質民俗の調査は、尚々廣い分野をもっている。読者は調査要目によってより廣き目を開かれない」（後藤 1950：84）と述べた。

陶立璠は前述した学者たちの分類法を分析した上で、自らの分類案（物質民俗、社会民俗、口承語言民俗、精神民俗）を提出した。「物質民俗」の中では、「居住、服飾、飲食、生産（農、林、牧、副、漁）、交通（運輸、通訊）、交易⁽³⁰⁾」を包括している。そこから、後藤との異同が明晰になる。

整理してみると、後藤興善の『民俗学入門』の中国語訳は1984年に出版され「物質民俗」という用語が紹介された。そして、陶立璠『民俗学概論』の出版後、中国学界においては「物質文化」「物質生活⁽³¹⁾」の用語のほか、「物質民俗」という用語が一般化され始めたと考えられる。

では、陶立璠は「物質民俗」をどのように定義したのか。

物質民俗とは、人々の日常生活中で、感じることができる有形の、居住・服飾・飲食・生産・交通・工芸などの文化伝承を指す（陶 1997：109）。

ここで注目したいのは、この定義と前述の分類案の違いである。分類案では「工芸」までは含まれていなかったが（表2参照）、定義には含められた。実際、「物質民俗」の章では居住、服飾、飲食、生産、交通のみが論述され、「工芸」は別章で論じられた。また、「交易」については一切言及しな

表2 陶立璠著『民俗学概論』中央民族学院出版社 1987 年 8 月（目次表）

第一章 導論	第一節 民俗和民俗学
	第二節 民俗学的研究領域
	第三節 学習民俗学的目的
第二章 民俗的基本特徴和分類	第一節 民俗の形成
	第二節 民俗の基本特徴
	第三節 民俗の分類
第三章 民俗の社会効能	第一節 民俗与社会生活
	第二節 民俗的作用及効能
	第三節 民俗学和其他社会学科の關係
第四章 民俗学方法論	第一節 什麼是民俗学方法論
	第二節 民俗学研究的基本方法
	第三節 民俗学研究程序及技術
第五章 物質民俗	第一節 居住民俗
	第二節 村落
	第三節 民間組織和民間職業集團民俗
	第四節 生産、交通民俗
第六章 社会民俗	第一節 家族和親族
	第二節 村落
	第三節 民間組織和民間職業集團民俗
第七章 歲時民俗	第一節 歲時民俗の形成和発展
	第二節 歲時民俗の形成和分類
	第三節 歲時民俗の特徴
第八章 人生儀礼	第一節 誕生儀礼
	第二節 成年儀礼
	第三節 婚姻儀礼
	第四節 喪葬儀礼
第九章 精神民俗	第一節 巫術及其民俗
	第二節 宗教、信仰民俗
	第三節 民間禁忌

った。

とはいえ、この本は日本語に訳され、1997 年『中国民俗学概論』（陶 1997）というタイトルで日本で出版された。1987 年中国語版では、12 枚の図を入れたが（主に「物質民俗」の章で居住に関わる民俗を説明するため）、写真はなかった。しかし、日本語版では、51 枚の写真が加えられ、さらに「物質民俗」の章には 20 枚の写真が加えられた。これらの写真には、「甘肅省の農村の古い農具」「ハニ族アイニ支系女性の「背籠」」「ペー族女性の「背籠」」などの民具が現れた。⁽³²⁾

2003 年、『民俗学概論』は『民俗学』（陶 2003）と改題され、中国で再版された。再版された本は、1997 年の日本語版で加えられた写真は再び中国側の編纂で見直され、「物質民俗」の章では写真が 45 枚に増えていた。2018 年に再度修訂され再版された（陶 2018）が、写真と図表に変化はなかった。

『中国民俗学概論』の「日本語版への序文」で、陶立璠は、当時の中国における民族学と民俗学の研究状況を踏まえながら、「これまでの中国の民俗学研究は往々にして漢族の民俗を主とし、多くの特色を持つ少数民族の民俗を軽視してきており、これまた遺憾と言わざるを得ません」（陶 1997：3）と述べた後、自分の著作を「ある意味では多少なりとも民族民俗学や比較民俗学という特色を持っています」（陶 1997：3）と位置づけた。しかし、『民俗学概論』初版発行後、物質民俗研究に先に呼応し成果をあげたのは、漢族より少数民族の民俗である。⁽³³⁾

IV 「民俗」と「文化」の交錯間の「物質文化」

続いては、「我が国の大学教育史における最初の民俗学教科書」（童 1999）といわれる『民俗学概論』（鍾 1998）を見てみよう（表 3 参照）。

この本は、鍾敬文という学者が編集を担当し、30 余名の学者が集まり、8 年をかけて生み出されたものである。1998 年 12 月に出版され、即時に大好評を博した。同じく、鍾敬文が編集した『民間文

表 3 鍾敬文主編『民俗学概論』上海文芸出版社 1998 年 12 月（目次表）

第一章 緒論	第一節 民俗与民俗学
	第二節 民俗的基本特徴
	第三節 民俗的社会効能
	第四節 中国民俗の起源与発展
第二章 物質生産民俗	第一節 農業民俗
	第二節 狩猟、遊牧和漁業民俗
	第三節 工匠民俗
	第四節 商業与交通民俗
第三章 物質生活民俗	第一節 飲食民俗
	第二節 服飾民俗
	第三節 居住建築民俗
第四章 社会組織民俗	第一節 社会組織民俗の分類描述
	第二節 宗教組織民俗
	第三節 社団和社団組織民俗
第五章 歳時節日民俗	第一節 歳時節日の由来和発展
	第二節 歳時節日の活動及特点
第六章 人生儀礼	第一節 人生儀礼の性質
	第二節 誕生儀礼
	第三節 成年儀礼
	第四節 婚姻儀礼
	第五節 喪葬儀礼
第七章 民俗信仰	第一節 信仰対象
	第二節 信仰媒介
	第三節 信仰表現方式
	第四節 民俗信仰の基本特徴
第八章 民間科学技術	第一節 民間科学知識
	第二節 民間工芸技術
	第三節 民間医学
第九章 民間口頭文学（上）	第一節 口頭散文叙事文学の体裁和分類
	第二節 口頭散文叙事文学の流伝和演変
	第三節 口頭散文叙事文学の講述和効能
第十章 民間口頭文学（下）	第一節 民間詩歌の起源与伝播
	第二節 民間詩歌の類別与特徴
	第三節 民間詩歌の体式、表現手法与効能
	第四節 歌節、歌俗、歌手
第十一章 民間語言	第一節 民間語言の性質
	第二節 常用型民間熟語
	第三節 特用型民間熟語
第十二章 民間芸術	第一節 民間音楽
	第二節 民間舞蹈
	第三節 民間戯曲
	第四節 民間工芸美術
第十三章 民間遊戲娛樂	
第十四章 中国民俗学史略	
第十五章 外国民俗学概況	
第十六章 民俗学研究方法	

学概論』から提供された「格式」が後の教科書の有り様を規定したように、『民俗学概論』の出版も、一種のパラダイムの創出と見なされる。例えば、この教科書の中で、「物質民俗」と「物質生活民俗」2章に分け説明している。このような分け方は、後の教科書に模倣⁽³⁴⁾され、また、このような認識は一般化され、中国民俗学界の通説になったため、中国民俗学界において物質文化の実証研究を行う際にも、その分け方を基準にして展開する⁽³⁵⁾。

この教科書が影響力を持つようになったのは、さまざまな意味で、中国民俗学の父と呼ばれる鍾敬文が編纂人であったためである。

鍾敬文は1934年から1936年の間、日本に留学した。前述の後藤の『民俗学入門』の中国語訳の出版も、鍾敬文の貢献を看過してはいけな⁽³⁶⁾い。彼が執筆したこの本の中国語訳への序文によれば、彼は日本に滞在している間、すでに後藤の研究に注目しており、そして1949年前後、北京でこの本を入手し読んだという。

前述した通り、バーンによる民俗学の研究対象の認識への批判やイギリス以外の国の学者らの定義紹介などの動きが、1930年代の中国民俗学界ではすでに起こっていたが、大きな反応を招いていなかった。一方で、バーンによる民俗学に関する言説は1980年代に入ってもなお影響がある。この状況を改善するため、鍾敬文は後藤の本を通じて、中国民俗学界にもっと柔軟な見方を示したいという考えを持っていた。

ところで、鍾敬文自身が日本民俗学の影響を受けて視野を広げ、民俗学の研究対象についての認識が変わったと記したことがある（鍾2002：49-50）。ちなみに、彼が日本滞在中、研究生として早稲田大学の文学部に入学した当時の指導教員は西村真次である⁽³⁷⁾。西村は古代船舶、古代文化史、人類学、民族学の研究者であるため、鍾敬文もその影響を受け、さらに「民俗」と「文化」の関係を重視してきたという（鍾1997、董2016）。とはいえ、彼の研究は主に文学的側面に集中し、この教科書の物質文化に関わる内容も彼が執筆したものではない。

晩年の自叙によれば、彼は帰国してまもなく「民間文化」という用語を考え出し、その後、「民俗」を「民間文化」に替えて、「民俗学」を「民間文化学」という呼び方に転換することを吟味し続けた⁽³⁸⁾。そして、1980年代の中国における「文化熱」の波に乗り、彼が「五四」時期民俗文化学的興起⁽³⁹⁾（鍾1989）で、「民俗文化学」という用語を用い始め、2年後の1991年「民間文化講演班」で「民俗文化学発凡」⁽⁴⁰⁾（鍾1992）と題する講演を行った（鍾1996）。

その時の鍾敬文は、民俗を「文化事象」として捉えていた。しかしながら、このような、「民俗」を「文化」の一側面として捉えることは、特に文化人類学者たちの考え方でもある。では、民俗学という学問の「制度化」、言い換えれば、「学科」の建設に熱心だった鍾敬文は、どのように隣接分野との立場の違いを強調するのかを考慮したと考えられる。つまり、「民俗」をただ単に「文化」の一側面として捉えるのは、この学問を矮小化する危険性があり、「学科」の正当性も見えにくくなる。

では、「文化」に属するもの、例えば「音楽」や「アート」などは、どのように「民俗学」の枠内に収められるのか。ある意味で、「民俗文化学」という用語の創出もこの疑問に答えるものである。鍾敬文の理解によれば、「文化」は「上層、中層、下層」に分けられる。彼が主張した「民俗文化」というものは「中層、下層」の「文化」であり、そして「民俗文化」とは、大体、民間に存在する物質文化、社会組織、意識形態及び口頭言語など各種の社会的習慣、風尚、事物のことを包含するもの⁽⁴¹⁾。

である。また、「物質文化」の類には、衣、食、住、行及び工芸の製作などに関わる形のある物と、主体者の物作りをめぐる伝承活動を含んでいると述べた（鍾 1992）。

この話を踏まえ、鍾敬文が編纂に加わった『民俗学概論』で「物質生産民俗」と「物質生活民俗」2章のほか、「民間工芸技術」と「民間工芸美術」の2節においても「物質文化」について詳しく論じた。

ちなみに、鍾敬文は「民俗文化学」は「現在学」であることを強調するため、この学科の社会的な効用も重視した。当時の中国社会において身近に消滅しつつある「伝統文化」を救うという現実の要請を、中国民俗学界はどのように受け入れるのか。古建築、古彫刻、民間の手工芸、アートなど実物と技術の保護と伝承に関して、中国民俗学界はどのような方法を提供できるのか。このような現実社会への関心に導かれ、物質文化、あるいは物の調査、収集、展示に関連する博物館なども研究の視野に入った。

さて、ここまで、主に三つの教科書をめぐって分析してきたが、いずれも物質文化に関する研究方法を示してなかったことも歴然としている。それでは、次の教科書に注目したい。

V 「フォークライフ」から生み出された「物質民俗」

ジャン・ハロルド・ブルンヴァン（Jan Harold Brunvand）著『The Study of American Folklore : An Introduction』は、1968年アメリカで出版された。中国では、李揚という学者がこの本を翻訳し、『美国民俗学』⁽⁴²⁾と題され1993年に出版された。

まず、注目したいのは中国語版の序言のことである。ブルンヴァンは、以下のように述べた。

ここ三十年間、アメリカの民俗学者たちの研究は、「フォークロア」（Folklore）という概念より広い「フォークライフ」（Folklife）に集中している。というのは、我々が口頭伝承とともに、伝統的な習俗行為及び伝統的な物質文化への注目を、自分の研究領域における重要な方向性と目している。一部の国においては、そのことを「民族誌」（Ethnography）と呼ぶが、我々は、スウェーデンの民俗学者が発明した「Folkliv」という術語を模倣しながら「フォークライフ」と称する。拙著は、「フォークロア」という概念をそのまま援用したが、いくつかの章においては、民間の食物、服装、建築及び工芸などについても詳しく検討した⁽⁴³⁾（ブルンヴァン 1993：1）。

言うまでもなく、民俗学は国によって研究対象や所属分野の違いがある。この序言によれば、当時のアメリカ民俗学界においては、「フォークライフ」という流派があることがうかがえる。

ブルンヴァンが言った「フォークライフ」という造語はスウェーデン語の「Folkliv」に基づき作られた用語であり、イギリス、スコットランド、アイリッシュ、ウェールズが率先して「フォーク・ライフ」（Folk Life）という用語を用いた（Peate 1963, Dorson 1965）。そして、アメリカ民俗学の「フォークライフ」という流派は主にスカンジナビアとドイツの影響を受けていた（Roberts 1988）。⁽⁴³⁾

スウェーデンにおいては、「folklivsforskning」という用語を用い、それは「フォーク・ライフ・リサーチ」（Folk Life Research）あるいは「フォーク・ライフ・スタディーズ」（Folk Life Studies）

のことを指している。さらに、この「フォーク・ライフ」研究は、「フォークロア」より「アンソロポロジー」(Anthropology)と「エスノロジー」(Ethnology)の分野に近い、「アンソロポロジー」の支脈と見なされており、「ノルディック」(Nordic)あるいは「ヨーロッパのエスノロジー」(European Ethnology)と呼ばれることもあった(Erixon 1962)。

「フォーク・ライフ」の研究はヨーロッパにおける「アンソロポロジー」と「エスノロジー」の曖昧な境界線の問題に関連し、1937年に雑誌『Folk-Liv』⁽⁴⁵⁾を創刊する際、「エスノロジー」と「フォークロア」を連合する目的にも用いられた(L. D. 1947)。「フォーク・ライフ」の研究は、この三つの学問の複雑な関係、とりわけ国ごとの異なる命名などの問題を露呈している。この研究実態を国ごとに整理しなければならないため、細かい説明は省略するが、ここで、「フォーク・ライフ」研究の中には、長きにわたり物質文化が注目を集めていた点と、物質文化をめぐる常に調査、収集、研究と連動するかたちで実践を展開する点も強調したい。つまり、家具、器物、家屋、服装など「伝統」的な物の調査を行い、それらに関わる方言、説話、信仰、歌や音楽などを蒐集^{しゅうしゅう}し、さらに地方博物館を設置し研究を行うことである。

ところで、アメリカにおいては、「フォークライフ」の研究は早い段階(19世紀)に遡ることも可能であるが(Bronner 1987)、もう一度開花するのは1960年代からである。前述した、「フォークライフ」研究を一番早くイギリスに紹介したセイスの一つの狙いは、当時のイギリス民俗学界に文学的側面のほか、住居や道具など物への注目を喚起すること(Sayce 1956)と同様に、1960年代のアメリカにおける「フォークライフ」の再発見もそれと同じ要請(口承文芸のほか「物質文化」を「フォークロア」の研究範囲に入れる)に伴った(Yoder 1963)。ちなみに、ブルンヴァンの教科書の「第二版の序言」では「マテリアル・フォークロア」(Material Folklore)を「フォークライフ」と称している(Brunvand 1978)⁽⁴⁶⁾。

さて、話を戻すと、第1版の翻訳『美国民俗学』で、李揚は「フォークライフ」という用語を「俗民生活」と翻訳した。そして、ブルンヴァン原著の第4版(1998年)に基づいた第2版『新編美国民俗学概論』(2011)では、「民衆生活」と翻訳した。次の版本『白頭鷹的隠形羽毛』(2020年)においても、「民衆生活」を用いていた。

また、本の中で、ブルンヴァンは第4部のタイトルを「マテリアル・フォーク・トラディションズ」(Material Folk Traditions)と付けており、「民間建築」(Folk Architectute)「民間手芸和芸術」(Folk Crafts and Art)「民間服飾」(Folk Costumes)「民間食物」(Folk Foods)と4章に分けていた(表4参照)。前掲のブルンヴァンの序言によると、この第4部はいわゆる「フォークライフ」の研究である。

「マテリアル・フォーク・トラディションズ」という用語は李揚により「物質民間伝統」と「物質民俗」の両方に翻訳されたこともある。そして、前述の陶立璠の本の出版と同じ時期に、趙厚憲が「民俗学簡介」(趙1985:95-97)の短い紹介文を書いた。彼はブルンヴァンの第2版の教科書(Brunvand 1978)を参照し、「口頭民俗」「習慣民俗」「物質民俗」の分類を示した上で、「物質民俗」について「即ち、民間の建築、工芸美術、服飾、医薬また食物等を指す」⁽⁴⁷⁾と解釈した。つまり、ブルンヴァンの「Material Folk Traditions」は中国学者により「物質民俗」という用語に対応され、下位項目(Folk Architectute, Folk Crafts and Art, Folk Costumes, Folk Foods)も「物質民俗」に包括

表4 J. H. 布魯範德著、李揚訳『美国民俗学』汕頭大学出版社 1993 年 12 月（目次表）

第一部 緒論	第一章 民俗学的領域
	第二章 民俗学的研究
	第三章 民衆類型：美国民俗文化伝統的伝承者
第二部 口頭民俗	第四章 俗語和俗名
	第五章 諺語
	第六章 謎語
	第七章 民謡和民間詩歌
	第八章 神話和伝説
	第九章 民間故事
	第十章 民歌
	第十一章 叙事歌
	第十二章 民間音楽
	第十三章 迷信
第三部 習慣民間	第十四章 風俗和節日
	第十五章 民間舞蹈和戲劇
	第十六章 民間手勢動作
	第十七章 民間遊戲
第四部 物質民間伝統	第十八章 民間建築
	第十九章 民間手工芸和芸術
	第二十章 民間服飾
	第二十一章 民間食物

されたと考えられる。

しかし、李楊はこの教科書を中国語に翻訳する際、参考文献と原著の各章末尾に付された「ビブリオグラフィック・ノート」(Bibliographic Notes)を省略してしまった。また、付録の四つの論文も収録されなかった。その中の一本は物質文化研究で高名な学者ヘンリー・グラッシー (Henry Glassie)⁽⁴⁸⁾の研究論文である。

ここまで述べてきたことは、ブルンヴァンの教科書の第1版に基づいている。中文訳の第1版以来18年目で、『新編美国民俗学概論』と題されて中国で再出版された。それは、ブルンヴァンの原著の第4版(1998)に基づき改訂したものである。第4版は内容を大幅に拡充しており、章テーマに合わせた研究事例も提示された。中文訳の第2版もそれを反映させた内容になり、民間建築に関する図なども加えられた。ただ、付録の論文は前の版同様、収録されなかった。2020年に出版された中国語訳の第3版は、あとがきによると、訳文の校正を行うだけで、ほかは第2版と同じである。⁽⁴⁹⁾

VI 「物質民俗学」

李楊の翻訳書が出版された7年後、アメリカに留学し、修士号を取得した王娟が、自分の講義稿に基づき執筆した教科書『民俗学概論』(王娟 2002)を上梓し(表5参照)、2011年に再版された(王娟 2011)。

本の枠組みから見ると、これまで中国で出版された教科書と異なり、アメリカ民俗学界の分類法を参照しており、本書はとりわけ注目すべきものであると評価された。

編著者の王娟は1989年から1991年まで、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校の修士課程で学び、指導教授はアラン・ダンデス (Alan Dundes) である。修士号を取得した1991年に帰国し北京大学の中文系で民俗学の講義(「民間文学」)を担当し始めた。1996年から1997年まで、インデ

表5 王娟編著『民俗学概論』北京大学出版社 2002 年 9 月（目次表）

第一章 概論	第一節 什麼是民俗学
	第二節 民俗学的產生与発展
	第三節 民俗的特点
	第四節 民俗的効能
	第五節 民俗事項の產生和伝播
	第六節 民俗学的分類
	第七節 中国民俗与中国伝統文化
	第八節 中国古代民俗調査与記録
	第九節 民俗与中国伝統的儒釈道思想
第二章 口頭民俗学	第一節 神話
	第二節 伝説
	第三節 民間故事
	第四節 諺語
	第五節 謎語
	第六節 繞口令
	第七節 民間歌謡
	第八節 史詩
第三章 風俗民俗学	第一節 迷信
	第二節 民間遊戯
	第三節 民間節日
	第四節 人生儀礼
	第五節 民間舞蹈
	第六節 民間戯劇
第四章 物質民俗学	第一節 民間美術
	第二節 民間飲食
	第三節 民間服飾
	第四節 民間建築
第五章 民俗学的研究	第一節 理論発展
	第二節 民俗調査

ィアナ大学で研修し、ヘンリー・グラッシーとリチャード・バウマン（Richard Bauman）の指導を受けていた。

「あとがき」によれば、グラッシーから学んだのは「物質民俗学」であり、バウマンから学んだのは「言語民俗学」である。まさに、1960 年代以降のアメリカ民俗学の主要な二つのテーマである（小長谷 2012）。

本書の第四章で「物質民俗学」を定義する際、アメリカ側の文献を引用し、「伝統的な物質文化を研究対象とするのは我々が物質民俗学と称するものである」（王娟 2002：209）と紹介した。また、「物質民俗学」の研究は「人類によって作られた作品」「作る過程」「作品を作る人」三つの面に注目すべきであるとも述べていた。すなわち、「物」「行動」「人」三つの研究ポイントを指摘した。

しかしながら、実際には、この章の 4 節は、「アート」の起源、中国飲食文化の意味、服装の機能、中国民間建築の類型、特徴などを概観する内容であり、三つの研究ポイントについて深められることはなかった。

ブルンヴァンの教科書の同じ章に対照すれば、彼が明確な問題意識を持ち、「フォークライフ」研究の進展と合わせながら、研究テーマと関連する学者らの研究課題を紹介するかたちで説明を展開した。一方で、王娟の教科書は、この章だけを見ると、これまでの中国国内の教科書との違いはそこまで大きくはなかった。

このような局面を招く原因について、まず、国によって教科書の書き方が異なり、研究進展も一致

していないことが挙げられよう。とはいえ、これまでの中国民俗学界はバウマンの研究が多く紹介されたが、グラッシー⁽⁵⁰⁾の文章や著書は訳されなかった⁽⁵¹⁾。また、近年では中国国内においても、物質文化⁽⁵²⁾に関する具体的な事例研究が相次いで現れていたが、このような研究を中国民俗学の枠内で確実に位置づけることはできなかった。

小括

これまでの分析を踏まえ、要約すれば、まず、方紀生の『民俗学概論』(1934)は、バーンが編著した概論書に基づいたものであるほか、当時の中国民俗学界における「民俗」及び「民俗学」への認識の限界も露呈したものだ。バーンはゴンムより、フィールドワークを強調したが、進化論の考えをもとにした彼女が重点を置いたのは、「原始的な考え」をいかにして遺存していたのかというメンタルの面である。「物」への注目も、その「物」にまつわる説話を蒐集するためである。1920年代後期のイギリス民俗学界は、この定義に関する検討が行われていたものの、さまざまな原因で中国民俗学界には波及していなかった。

そして、「物質民俗」の用語は、後藤興善の『民俗学入門』の中国語訳の出版(1984)をきっかけとして、中国民俗学界に導入され、陶立璠の『民俗学概論』の出版(1987)によって、普及し始めた。その後、中国民俗学界は「物質文化研究」を指す際に、「物質民俗」「物質民俗学」という二つの用語を用いるようになる。

それに関して、陶立璠は主に「居住、服飾、飲食、生産、交通」をめぐり「物質民俗」を説明した。その一方、1930年代から、「民俗」と「文化」の関係を考慮し「民俗学」という名称を変更する意欲を持つ鍾敬文が1989年に「民俗文化学」という用語を提出した。彼が主導した『民俗学概論』(1998)では、陶の教科書ではあまり重視されていなかった物質文化に注目し、「民間工芸技術」と「民間工芸美術」の2節が設けられていた。

他方、民俗学における物質文化研究は、スカンジナビアから始まった「Folkliv」研究との関連があり、アメリカ民俗学界が一つの受け皿として、フォークロアからフォークライフへの転換を行った。この動向は自国の教科書にも反映された。その教科書の中でフォークライフに対応する「民間建築」「民間手工芸、芸術」「民間服飾」「民間食物」の研究内容は、中国民俗学者の直接的な翻訳により、「物質民間伝統」と「物質民俗」という二つの用語に包含された。さらに、中国民俗学者は、アメリカ民俗学⁽⁵³⁾の成果を間接的に参照しながら、中国民俗学界に向け「物質民俗学」の枠組みを創出し、「民間美術」「民間飲食」「民間服飾」「民間建築」の順番で説明を行った。しかしながら、これまでの中国民俗学界は、この面においての研究は少なく、主に文献を中心に蓄積していた。

それゆえ、中国民俗学の教科書では、実際の教育現場において、どのような機能を演じているのかを脇に置けば、「物質民俗」あるいは「物質民俗学」の研究手法、すなわち、具体的な物についての実証研究と理論研究は紹介されず、物質文化の捉え方は表面的なものにとどまっていたのである。

おわりに

本稿は教科書を糸口として、中国民俗学における物質文化の捉え方を中国民俗学史に還元し検討してきた。今回の分析によって、いくつかの問題点が考えられ、ここでは、それらの問題を五つの面から論じてみたい。

(1) 分けて考えること

中国民俗学の教科書では、民俗学の研究対象、範囲などは理路整然と書かれていたが、逆に考えてみれば、そこは問題点として捉えることもできる。

日本民俗学の教科書の中にも、「直接、民具や物質文化について取り上げていなくても、随所に物質文化研究と重なりを持つ項目が散見される」（角南 2019：136）と指摘されたように、中国民俗学の教科書の「社会組織民俗」「人生儀礼」「民間科学技術」などの章の中にも、道具など物質文化に関わることが現れる。

では、そもそも、「民俗」というものを切り離して考える、ないし研究するのは無難なことなのだろうか。

2002 年に出版された『民俗学導論』（葉・呉 2002）という教科書においても、著者の 2 人は、それまでの教科書の中に使われた物質民俗、精神民俗、社会民俗などの分類を省みて、それらの分類は一体何の基準に基づいたのか、ただの「事象の分類」ではないのか、という問いを呈し、分類の曖昧さを批判した。

一見したところさまざまな事象が存在しているが、ただ、「さまざまな」違いは単に「表象」の違いにすぎない。「事象の分類」にとどまるだけで、事象を羅列することは、分類とはいえない。さらに、このような分類上の不明確さから、これは「民俗学」とはいえない、あくまでも民俗事象の「紹介学」ではないのか、といった指摘もなされた（葉・呉 2002：258）。

このような考えによって、バーンが編集した『民俗学概論』をもう一度確認すると、彼女は決して物質を無視するのではなく、むしろ「もの」を通じて伝説、神話、信仰などの面を捉えるような説明を行った」（角南 2018）ことも、より明白になる。

(2) 観念上の「物質」

1980、90 年代の中国民俗学教科書において、マルクス主義的な記述が散見されるのは不思議ではない。例えば、「民俗が形成された原因」を解釈する際に、まず「経済的原因」が挙げられ、「マルクス主義の基本点の一つは、経済的基礎が上部構造（意識形態）を決定するということです。民俗は一種の文化事象であり、その発生はすべて経済的基礎、即ち社会生産力発展の制約を受けます。経済的基礎を超越した民俗などは考えられないのです」（陶 1997：25）といった説明を行った。

そして、物質民俗については、「経済民俗」の部に置かれる例もまれではない。さらに、「生産」を「生活」から解離させ、「生活」より「経済」と直接に関わる「生産」がもっとも重視された⁽⁵⁴⁾。それに沿って、「生産様式」や「生産力」に関わる物質的活動の中に使われる「物」が一番注目を集めた。

だが、このような唯物論的思考から生み出された抽象的な産物としての「物質」（「下部構造」と呼

ぶもの)は、より具体的な素材を指す「物質」ではなく、「経済的基礎」としての観念上の「物質」⁽⁵⁵⁾である。したがって、教科書の中の記述も、厳密に言えば、「物質」そのものをはっきり観察、認識するのではなく、「物質」を通してそのものに関わる事象を捉えることが目的である。さらに、事象を捉えた上で、機能的分析や象徴的分析を行う。すなわち、「物」「人」「行動」のすべてが無視されていた。

この問題は民俗学研究の方法論とも関連しているため、中国民俗学者の中にも反省が起き、パラダイムの転換が行われた。⁽⁵⁶⁾ただし、「人」「行動」への関心が強調されてきた一方、「物」はずっと看過⁽⁵⁷⁾された。ゆえに、民俗学の視座から物質文化を多面的に考察する可能性も失われたのである。

(3) 「伝統的な」民俗

物質民俗は、工芸、建築、飲食、服装などの項目に切り離され研究される傾向がうかがえる。また、物質民俗の研究では「伝統的な」要素を帯びる部分は、優先的に研究対象とみなされた。「フォークロア」「フォークカルチャー」「フォークライフ」の転換が起こっても身近な物事へのまなざしは重視されていなかった。「文献の国」と称される中国においては、物質民俗に関する研究蓄積は「文献中心型」と言っても過言ではない。

しかしながら、民俗学は、「現代社会」(modern world)といかに向き合うのかという問いとともに成熟してきた学問である。それと照応し、物質民俗研究を行いながら「伝統」への再認識も喚起すべきである。

(4) 「学際的な」研究

昨今、物質文化という大雑把な問題意識に基づく研究は他分野において盛んになっており、成果も多く現れていた。それに対し、中国民俗学界は物質民俗学と唱えても、独特な研究は少ない。また、他分野の研究を吸収しても、例えば、日本の民具学を教科書の中に導入しても、ごく簡単な紹介にとどまり(刑 2016)独自の研究手法は生み出されていなかった。

物質文化研究、あるいは「フォークライフ」研究は学際的な研究領域であると広く認知される一方、中国民俗学界はどのように研究の接点を作り上げ、分野横断的な対話につなげるのかも依然大きな課題である。

(5) 手段としての教科書

物質文化の捉え方から反映された一つの問題は、中国民俗学界の教科書の書き方と関連している。生き生きとした学問の境界線はたえず揺れている。作った体系や制度を調整することにより、教科書の中にはこの学問が開拓される空間を用意しなければならない。

しかし、中国民俗学の教科書は、学問学科の「過去」のほうに紹介の力点を置く傾向が容易に見られると述べている(王晓葵 2006)ように、このような動態感の欠如は、未来の研究展望はともかく、「現在進行的」研究動向、民俗学研究の新しいアプローチなどを反映することもできなかった。⁽⁵⁸⁾

いずれにしても、今の中国民俗学界は、決して教科書が過剰生産されている状況とはいえない。むしろ学術の領野で自己確認の手段としての、研究動向とともに「成長」する民俗学教科書の誕生を期

待したい。

謝辞

本稿の作成にあたって、友人の陳久蘭氏、余櫟驊氏、崔雅氏、小野寺佑紀氏から資料収集に協力をいただき、大変感謝している。また、論文執筆中に、田村和彦先生からご助言をいただいたことにも謝意を表したい。

註

- (1) 本稿の分析対象は「民間文学」「民間文芸」ではなく、「民俗学」と名付けられたという特性を持つ一部の教科書である。また、本稿で言及する「教科書」は、基本として中国大学における民俗学に関する知識を習得するために使う書物であり、「民俗学入門」「民俗学概論」「民俗学」「中国民俗学」といったタイトルから見れば、「概説書」「概論書」「入門書」「参考書」などの意味を含む「教科書」である。すなわち、「教材」という用語に包括される書物のことを指す。ただ、より厳密に区別すると、「教材」と称する書物は、実は教学対象・目標等の設定が必要であり、大学の講義録のような書物は「教材」と称されるかどうかは検討の余地がある。さらに、概念としての「教科書」「教材」は時代によって、その意味に変化も生じる。それらについての検討は別稿に譲ることにしたい。なお、民俗学における「教科書」の初出をめぐっては、さまざまな捉え方があるが、これらの問題についても検討の余地はある。
- (2) 中国には「教科書」(テキストブックの訳語)という用語が受容される以前、「課書」「課本」のような呼び方もあった。一体誰が最も早く中国で「教科書」という用語を用いたのかに関しては、中国学者らの議論を引き起こした。「教科書」という用語を用いたのはキリスト教の宣教師たちの在華活動に関連するといわれたが(畢 2010)、1887年黄遵憲が『日本国志』の中で、この用語を最も早く用いたということが現時点における一つの結論といえる。また、中国における教科書の編纂は日本との関係も深い。例えば、1901年になると、留日学生が「訳書彙編社」を作り上げ、日本の大学教科書を翻訳し中国へ紹介したこともあった(川上 2010)。そして、1903年旧暦11月に頒布された「奏定学堂章程」(癸卯学制)により、中国の学校教育は、初等・中等・高等教育の三段階に分けられ、それに伴い、近現代中国における教科書の編纂事業も盛んになっていた。今日になると、中国の学校で使われる書物、すなわち教学用のものは、「教科書」と呼ばれるほか、「課本」と呼ばれる場合も多い。また、「教科書」に対する一般的なイメージは、小中高等学校で使われるもので、しかも教育部(日本の文科省に相当)の検定を通ったものに特定して指す場合が多い。ただ一方で、大学、専門学校、ないし自動車学校のようなところで教学のために使われる(教育部の検定を通らなくても)書物を、一括りにして「教科書」とも呼ぶ。このような書物のタイトルも多様であるため全部羅列するのは控えるが、「〇〇入門」「〇〇概論」「〇〇読本」といったタイトルが最も分かりやすい。
- (3) 中国民俗学の学史については(直江 1967)(王京 2021)を参照。
- (4) 詳細については(沈 2015)を参照。
- (5) 1928年第1期から第12期まで連載した。
- (6) この機関誌及び当時の中山大学における民俗学の展開状況については(施 2011)を参照。
- (7) この本は再版された場合が多く、方紀生編著のものより受容層は大きいと想像されるが、内容は岡正雄が訳したバーン編著『民俗学概論』を多く参照し、物質文化に関して直接に触れていなかった。ただ、彼は1929年の台湾調査の際に「民族標本」を蒐集することもあった(林 1981)。また、1934年に上梓した教科書『文化人類学』(林 1934)では物質文化について詳述した。それゆえ、本稿では林恵祥著『民俗学』という本を取り上げない。
- (8) 「少数民族社会歴史調査」については(松岡 2011; 2012)(中央民族大学民族博物館編 2018)を参照。
- (9) 1987年5月から「中国民間文芸家協会」に改名された。
- (10) 当時の中国社会における政治的雰囲気と社会学の状況については(陸 2019)を参照。

- (11) この研究会は1979年10月2日に北京で復活した。
- (12) 第107期で休刊。
- (13) 顧頡剛(1893-1980) 歴史学者。
- (14) 白寿彝(1909-2000) 北京師範大学歴史系教授、歴史学者。
- (15) ちなみに、雲南大学の中国語文学系で「民間文学」を専攻する大学院生の募集もその年から始めた(張多2021)。
- (16) 学科設置の変動や中国民俗学にとっての意味合いについては(王2021)を参照。
- (17) 例えば、(烏1985; 張紫晨1985; 陶1987; 陳勤建1989; 陳啓新1996; 陳華文1998; 鍾1998)。
- (18) 周作人(1885-1967) 文学者。
- (19) 許地山(1894-1941) 宗教学者。
- (20) 特に藤澤衛彦の「伝説論」という授業には必ず参加したという(川辺・鳥谷2019)。
- (21) ちなみに、この本が中国で出版された際に、著作情報は「編著」から「著」のかたちになった(査・索・博爾尼1995)。1930年代頃、バーン編著の『民俗学概論』を紹介や引用した際にも、中国の学者らが「編著」と「著」の差異を明白に意識していなかったようである。さらに、自ら教科書を編纂する際にも、同じような問題が現れていた。
- (22) ただ、1930年代以降の中国民俗学界では、諸国における民俗学の分類案を振り返りながら、本国の特有な分類法の創出を模索する動きが起こった。例えば、江紹原「關於 Folklore、Volkskunde、和「民学」的討論」(江1932・1988)、婁子匡「民俗学的分類」(婁1933)、張瑜「民俗学的性質、範圍和方法」(張瑜1934・1986)、楊成志「民俗学之内容与分類」(楊1942)。それらの議論の中にも、バーンの定義ないし当時のイギリスにおける民俗学の研究対象や範囲に対する反省が現れた。
- (23) 中国語原文：最近民俗学界的趨勢、擬把較早的界說、有意排除的民衆美術及民衆技芸都歸入民俗範圍、這樣、鄉農之物質的及知識的文化、亦被包含於其中。
- (24) 原文：「Les Maisons, les Ustensiles et les Costumes, Les Arts populaires」。この訳語については、日本語訳：「民家、家具、衣服、民間工芸」(後藤1950) 中国語訳：「房屋、家具、衣飾、民間芸術」(楊成志1942)、「房屋、用具、服装、民間芸術」(楊堃1932)。
- (25) Roderick Urwick Sayce (1890-1970) ウェールズ生まれの考古学者、地理学者、民俗学者であり、1944年からイギリス民俗学会の委員会に入り、北欧の「フォーク・ライフ」研究を一番早くイギリスに紹介したひとりである。
- (26) 江紹原と中国民俗学の関連については(子安2008)を参照。
- (27) そのほか、方紀生と周作人の関係を考慮に入れると、あくまで傍証ではあるが、彼も江紹原と同様に、ライトの情報を周作人から得たかもしれない。ただ、筆者が確認したところでは、方紀生の教科書の中に書かれたライトの演説の翻訳は江紹原の翻訳と差異が生じている。
- (28) ここで紹介した柳田の分類については、『郷土生活の研究法』(柳田1935)に記されたことと少し違い、恐らく後藤興善著『民俗学入門』(後藤1950)に拠っているものと思われる。つまり、同書で触れられた柳田の1932年夏期講習会における講演の内容である。ただ王汝瀾が後藤の本を中国語に翻訳する際に、少し言葉遣いの変動がある。中国語原文：「習慣(生活技術)：1. 居住、2. 服装、3. 食物、4. 生産、5. 労働組織、6. 家、7. 村、8. 聯合、9. 交際、10. 婚姻、11. 誕生、12. 成年式同年集団、13. 死亡、14. 歳時活動、15. 祭神、16. 占ト、17. 舞蹈、18. 競技、19. 兒童遊戲」(後藤1984：23-25)。
- (29) 中国語原文：村莊(市鎮)、家庭(家具)、服装、食物、農業、漁業、林業、焼炭、狩獵、民間工芸(技術方面)、民俗芸術(技巧)、交易、交通等。
- (30) ところで、後藤興善という学者が一番周知されたのは、フランス学者ジェネップの『民俗学入門』(ジェネップ1932)を日本語に翻訳したことである。後藤の『民俗学入門』も同書の影響を強く受けた産物であり、ただ、彼の自著はそこまで注目されなかった。しかし、柳田国男が最初用いた「民間伝承」という用語もフランス語「tradition populaire」から訳されたものであることと、戦後初期に柳田の「社会科」教科

書作りの実践に関連するこの後藤興善の本のことを考えると、注目されなかった理由は追うべきことであろう。そのほか、郷土をよく観察、調査する郷土教育と関連を持つ「社会科」の動きから考えてみると、「物質民俗」という用語は中国民俗学界に導入された後、それにふさわしい研究が少なかった点に関しては、アカデミック化へ進んでいる中国民俗学と「郷土」の関係はもう一度問わなければならないだろう。

- (31) 陶の書より早く出版した烏丙安著『中国民俗学』（烏 1985・元々『民俗学概論』と題されたがその後改題）の中では、「物質民俗」ではなく「物質生産的民俗」という表現を使った。また、張紫晨著『中国民俗与民俗学』（張紫晨 1985）は、「服飾、飲食、居住、建築、生産」などに分類したが、「物質民俗」という包括的な用語を用いなかった。ただ、陳勤建著『中国民俗』（陳 1989）は「有形物質民俗」という用語を用いていた。そのほか、管見の限りでは、最も早く「物質民俗」という用語を用いた論文は、1989年に発表された「物質民俗：一個有待開拓的研究領域」（楊・秦・李 1989）という一文（雲南少数民族の「生産民俗」を研究しようと提唱した）と、1994年に発表された「果洛藏族物質民俗述略之一：服飾、飲食民俗」（李麗 1994a）「果洛藏族物質民俗述略之二：居住、生産、交通民俗」（李麗 1994b）の二文である。三つの論文も、陶の概論書の影響がうかがえる。
- (32) ちなみに、本の監訳者である佐野賢治が執筆した『民俗研究ハンドブック』の「民具論」（上野ほか 1978：245-249）の一章は、中国民俗学者たちに「民具」という用語を学界に導入する際、大いに参照された。詳細については（余 2022）を参照。
- (33) 例としては、（楊・秦・李 1989；李 1994a；1994b；尹 1996）など物質民俗という用語を論文のタイトルに用いている。
- (34) 例としては、（苑・顧 2003）（羅 2010）。
- (35) 例としては、孟凡行の研究（孟 2019）。ただ、同書の中でこの分け方に対する反省や補足も言及している。
- (36) （後藤 1950）の序言とはしがきによれば、鍾敬文が指しているのは『「社会科」のための民俗学』（火星社 1948）である。
- (37) 西村真次の研究は 1931 年すでに中国に紹介された。
- (38) 「文化研究ブーム」、あるいは「文化論ブーム」と称する。また、「文化熱」と「民間」という用語の関連、「物質文明建設」など時代思想については、（村田 1989）（菅原 1999）を参照。「文化熱」に関する当時の中国民俗学界の反応については、（劉鉄梁 2002）の一文に少し言及した。
- (39) 1988 年 6 月、鍾敬文は「民間文化論著訳叢」というシリーズに序言を執筆した頃は、民間文化科学は民俗学、民族学、民間文芸学を包含していると書いていた（鍾 1996：81）。1992 年 1 月、馬昌儀という学者のインタビューを受けたところ、彼は「民間文化学」と「民俗文化学」は大体同じものであるが、「民俗文化学」という表現はより明白であり、彼自身の「民俗」に対する認識はすでに拡大し、「民間文化」全体を包括できるようになったと述べた（鍾 1996：272）。
- (40) ちなみに、後に、『民俗文化学』（陳華文 1998）という題名の教科書も出版された。その中の章のタイトルも、「物質民俗」から「物質民俗文化」へに転換された。
- (41) 河野真は「民俗文化」という用語を詳しく検討していた（河野 2005）。中国民俗学及び翻訳の文脈における「民俗文化」という概念に関しては今後の課題としたい。
- (42) （Brunvand 1978）に基づき翻訳したものである。
- (43) 中国語原文：近三十年来、美国学者更趨向致力於研究較「民俗」（Folklore）概念更為寬汎的「俗民生活」（Folklife）。這就是說、我們將傳統的習俗行為和傳統的物質文化同口頭傳統一道作為我們研究領域的重要方面。有些国家称之为「民族誌」（Ethnography）、我們現在即做照瑞典民俗学家發明的術語「Folkliv」而称为「俗民生活」。拙著表面上仍沿用了「民俗」一詞、但實際上有些章節專門討論了民間食物、服飾、建築及工藝等。
- (44) 直接的にスカンジナビア半島から、あるいは間接的にブリテン諸島からの影響を受けた。詳細は次を参照：（Thompson 1961；Dorson 1965；Riedl 1966；Yoder 1976）

- (45) 1971 年からこの機関誌の名称は『Ethnologia Scandinavica』に変更された。変更する理由の一つは、「フォークロア」を「マテリアル・カルチャー」「ソシアル・カルチャー」とともに、この「ノルディック・エスノロジー」(Nordic Ethnology) の機関誌に収めるべきであることを強調したいという。
- (46) 付言すれば、当時のアメリカにおいては「フォークライフ」という用語の普及は社会思潮との関連を持っている。当時のアメリカ民俗学界は、積極的に社会への関与活動を行った。その場で、「フォークロア」という用語が帯びた政治の汚名や非難を避けるため、戦略的に「フォークライフ」の用語を使ったと言われたこともある (Camp 1983; Abrahams 1993; Ben-Amos 1998)。また、「フォークライフ」と「フォークロア」の包含関係についても異議が噴出された (Yoder 1976)。ちなみに、同じ頃「フォーク」(folk) という用語の代わりに、言語学から借りた「ヴァナキュラー」(vernacular) という用語が「ヴァナキュラー・アーキテクチャ」(vernacular architecture) の文脈において重視された。ヘンリー・グラッシーもそれを提唱する一人である。
- (47) 中国語原文：物質民俗即是指民間的建築、工藝美術、服飾、醫藥和食物等。
- (48) (Brunvand 1978: 391-420)「第二版の序言」によると、グラッシーの論文は第 1 版に基づき修訂した上でまた掲載されたものである。
- (49) ちなみに、出版宣伝から見ると、ブルンヴァンの「都市伝説」の影響が大きいのは再版の主因であると推測される。ただ、この辺りは教科書をどのように読み取れるのかという問題も関連しているゆえ、本稿では論外にしておく。
- (50) 補足すれば、グラッシーと「フォークライフ」研究の一部の関連は、彼がアメリカにおける「フォークライフ」研究の一つの中心であるペンシルベニア大学の「民俗学科」(folklore department) に進学し、博士号を取ったことから見える。また、彼の先生でもあり、研究仲間でもある「フレッド・B・クニフェン」(Fred B. Kniffen)「ドン・ヨーダー」(Don Yoder)「エミル・エスティン・エヴァンス」(E. Estyn Evans) などとの関係からも追跡できる。
- (51) これまでの中国民俗学界においては、グラッシーや、アメリカ民俗学の物質文化研究を紹介する論文はごく僅かである。(彭 2000)(張・李 2012)(程 2018)(Jones 2005; 2006a; 2006b)。
- (52) 例としては、(崔 2011)(意 2013)(張・周 2020)。
- (53) 付言すれば、日本では『物質民俗学の視点』(若尾 1988; 1989; 1991) の全 3 冊本があり、物質面から伝説の研究を行うものである。
- (54) 「消費」の面については言及していなかった。
- (55) この問題の後ろに隠されたことは、自然と文化の間の境界線である。具体的な例を挙げると、葉濤・呉存浩著『民俗学導論』という教科書の中に、「物質」を「自然物質」(自然界の物)と「文化物質」(人類の文化的創造による物)に分け、「物質民俗」の研究範囲を「文化物質」に限定している(葉・呉 2002: 270)。
- (56) 詳細については(周 2003)(劉曉春 2009)を参照。
- (57) この点については、主体と客体の二元分立論から物質文化研究に関する方法論的省察をひき出すことでもある。詳細については(インゴルド 2021)(古谷 2010)(古谷・関・佐々木 2017)などを参照。
- (58) 例としては、(陳泳超 2015)(戸 2017)(施 2020)(日常と文化研究会 2015)など。

参考文献

日本語 (五十音順)

- 飯島吉晴 1990「アメリカにおける「民俗」概念の変容“モノ”から“過程”へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』(27)
- 岩田重則 2021『赤松啓介：民俗学とマルクス主義と』有志舎
- 岩竹美加子編訳 1996『民俗学の政治性：アメリカ民俗学 100 年目の省察から』未来社
- インゴルド、T. 著、柴田崇ほか訳 2021『生きていること：動く、知る、記述する』左右社

- 上野和男ほか編 1978『民俗研究ハンドブック』吉川弘文館
- 王京 2021「学問としての民俗学、学科としての民俗学：現代中国民俗学の葛藤」西村真志葉訳『人文学報・特集 東アジアの民俗学』(118)
- 小熊誠 1981「中国における民俗学と民族学：費孝通の学説分析を中心として」筑波大学地域研究研究科修士論文
- 川上哲正 2010「清末民国期における教科書：教育制度と教科書制度・教科書の変遷」並木頼寿ほか編『近代中国・教科書と日本』研文出版
- 礪川全次 1998「珍書発掘・後藤興善『民俗学入門』『歴史民俗学』」(11)
- 河野真 2005「〈民俗文化〉の語法を問う」『文明 21』(14)
- 後藤興善 1950『民俗学入門』火星社
- ゴドリエ、M. 著、山内昶訳 1986『観念と物質』法政大学出版局
- 小長谷英代 2012「アメリカ民俗学の現在・過去・未来」小長谷英代・平山美雪編訳『アメリカ民俗学：歴史と方法の批判的考察』岩田書院
- 子安加余子 2008『近代中国における民俗学の系譜：国民・民衆・知識人』御茶の水書房
- サンティエ、P. 著、山口貞夫訳 1944『民俗学概説』創元社
- ジェネップ、A. V. 著、後藤興善訳 1932『民俗学入門』郷土研究社
- 鍾敬文著、高木立子訳 1997「私の民俗文化学：その来しかた行く末」『比較民俗研究』(15)
- 菅原慶乃 1999「現代中国における国民・文化・ナショナリズム：80年代「文化熱」を中心に」『野草』(63)
- 角南聡一郎 2018「説話伝承と古墳、その不可分な関係：両者の関係から考える文化財保護」『説話・伝承学』(26)
- 2019「さまざまなモノ研究と民俗学」『日本民俗学』(300)
- 陶立璠著、上野稔弘訳、佐野賢治監訳 1997『中国民俗学概論』勉誠社
- 直江広治 1967『中国の民俗学』岩崎美術社
- 日常と文化研究会 2015『日常と文化』(1)
- バーン、C. S. 編著、岡正雄訳 1927『民俗学概論』岡書院
- 古谷嘉章 2010「物質性的人类学に向けて：モノ（をこえるもの）としての偶像」『社会人類学年報』(36)
- 古谷嘉章ほか共編 2017『「物質性」の人類学：世界は物質の流れの中にある』同成社
- 松岡正子 2011「四川における 1950～60 年代の民族研究（1）」『国際問題研究所紀要』(137)
- 2012「四川における 1950～60 年代の民族研究（2）：李紹明が語る『中国少数民族問題五種叢書』と政治民族学」『国際問題研究所紀要』(139)
- 村田雄二郎 1989「中国当代思想と「五四」」『現代中国』(63)
- 若尾五雄著、森栗茂一編 1988～1991『物質民俗学の視点』（全 3 巻）現代創造社
- 柳田国男 1935『郷土生活の研究法』刀江書院
- 余璋 2022「再建と再会：学術用語「民具」の中国民俗学界への紹介をめぐって」『非文字資料研究』(24)

中国語（アルファベット順）

- 畢苑 2010『建造常識：教科書与近代中国文化転型』福建教育出版社
- 査・索・博爾尼著、程德祺ほか訳 1995『民俗学手冊』上海文艺出版社
- 陳華文 1998『民俗文化学』天津人民出版社
- 陳啓新 1996『中国民俗学通論』中山大学出版社
- 陳勤建 1989『中国民俗』中国民間文艺出版社
- 陳泳超 2015『背過身去的大娘娘：地方民間伝説生息の動力学研究』北京大学出版社
- 程夢稷 2018「民居的「語言」：亨利・格拉西『弗吉尼亞中部民居』評述」『民間文化論壇』(3)
- 川辺比奈・鳥谷まゆみ 2019「方紀生的事：『周作人先生的事』之編輯及其奉獻給中日文化交流的一生」早稻田

- 商學同攷會編『文化論集』(55)
- 崔明昆 2011『象徵與思惟：新平傣族的植物世界』雲南人民出版社
- 董曉萍 2016「鍾敬文留日研究：東方文化史與民俗學」『北京師範大學學報（社會科學版）』(5)
- 2018「國家・歷史・民俗：女性學者的民俗學遺產」『西北民族研究』(5)
- 董學芸 1991「美國和加拿大高等院校民俗學專業及課程設置狀況」(2)
- 方紀生編著 1980『民俗學概論』北京師範大學史學研究所資料室（初版 1934 年）
- 馮驥才主編 2014『中國口頭文學遺產數字化工程全記錄』中國文史出版社
- 『國務院學位委員會公報』1981 年 10 月 15 日第 1 号
- 國務院學位委員會辦公室、國家教育委員會研究生司編 1988『中華人民共和國學位與研究生工作文件選編』北京航空航大出版社
- 國務院學位委員會辦公室、教育部研究生工作辦公室編 1999「授予博士、碩士學位和培養研究生的學科、專業目錄」『學位與研究生教育文件選編』高等教育出版社
- 何思敬 1928「民俗學的問題」『民俗（週刊）』(1)
- 後藤興善等著、王汝瀾譯 1984『民俗學入門』中國民間文藝出版社
- 戶曉輝 2017『日常生活的苦難與希望：實踐民俗學田野筆記』中國社會科學出版社
- J. H. 布魯範德著、李揚譯 1993『美國民俗學』汕頭大學出版社
- 姜彬主編 1992『中國民間文學大辭典』上海文藝出版社
- 李家寶 1979「高校文科教材建設簡訊」『人民教育』(12)
- 李麗 1994a「果洛藏族物質民俗述略之一：服飾、飲食民俗」『青海民族研究』(1)
- 1994b「果洛藏族物質民俗述略之二：居住、生產、交通民俗」『青海民族研究』(2)
- 李玉琴 2010『藏族服飾文化研究』人民出版社
- 劉鉄梁 2002「鍾敬文「民俗文化學」的學科性質及方法論意義」『北京師範大學學報（人文社會科學版）』(2)
- 劉曉春 2009「從「民俗」到「語境中的民俗」：中國民俗學研究的範式轉換」『民俗研究』(2)
- 林繼富・張旺 2017「中國民俗學教材建設研究：基於 20 世紀 80 年代以來民俗學教材分析」『贛南師範大學學報』(4)
- 林惠祥 1931『民俗學』（萬有文庫第 1 集 483）商務印書館
- 1934『文化人類學』商務印書館
- 1981『林惠祥人類學論著』福建人民出版社
- 婁子匡 1933「民俗學的分類」『民俗』(119)
- 陸遠 2019『傳承與斷裂：劇變中的中國社會學與社會學家』商務印書館
- 羅曲主編 2010『民俗學概論』中國社會科學出版社
- 孟凡行 2019『鄉民行動的物質呈現：一個閩中村落的時空結構、日常生活與文化遺產（1930-2010）』東南大學出版社
- Jones. Michael Owen 著、遊自瑩譯 2005「手工藝・歷史・文化・行為：我們應該怎樣研究民間藝術和技術」『民間文化論壇』(5)
- 2006a「什麼是民間藝術？它何時會消亡：論日常生活中的傳統審美行為」『民間文化論壇』(1)
- 2006b「感受形式、渴望創造、需要表達：家居、工作場所和聖殿中的藝術和審美」『民間文化論壇』(2)
- （作者不明）1999「『民俗學概論』研討會舉辦」『北京師範大學學報（社會科學版）』(3)
- 彭牧 2000「美國民俗學的昨天與今天」『中華讀書報』
- 喬英斐・李揚 2013「『美國民俗學概論』與『中國民俗學』比較分析」『神州民俗』(214)
- 全國保護民間文化座談會 1986 年 5 月 26 日「關於搶救、保存、保護民間文化的倡議書」
- 瑞愛德著、江紹原編譯 1988『現代英吉利謠俗及謠俗學』上海文藝出版社（初版 1932 年）
- 沈梅麗 2015「民國時期外國民俗學理論譯介與現代民俗學構建」『西北民族研究』(1)
- 施愛東 2004「概論教育與概論思惟」『西北民族研究』(1)

- 2010『中国現代民俗学検討』社会科学文献出版社
- 2011『倡立一門新学科：中国現代民俗学の鼓吹、経営と中落』中国社会科学出版社
- 2020「民俗学就是關係学」『民俗研究』（6）
- （作者不明）1932「書報紹介・西村真次著『人類学汎論』」『国立北平図書館読書月報』（11）
- 陶立璠著 1987『民俗学概論』中央民族学院出版社
- 2003『民俗学』学苑出版社
- 2018『民俗学（修訂版）』学苑出版社
- 2020「我与中国民間文芸家協會の相識、相知」『民間文化論壇』（3）
- 童古 1999「我国第一部民俗学教材問世」『高校社科信息』
- 塗石 1999「『民俗学概論』出版在京引起反響」『出版参考』（5）
- 王娟編著 2002『民俗学概論』北京大学出版社
- 著 2011『民俗学概論（第二版）』北京大学出版社
- 主編 2017『中華大典・民俗典・物質民俗分典（1-3）』北京日報出版社
- 王曉葵 2006「日本民俗学の新視野：從兩部日本民俗学概論談起」周星主編『民俗学的歴史、理論与方法』（上冊）商務印書館（初出 2003 年）
- 王熾文 1988「北美高校民俗学課程開設狀況」『民俗研究』（3）
- 烏丙安 1985『中国民俗学』遼寧大学出版社
- 吳小欧 2020「『教科書』考釈」『華東師範大学学報（教育科学版）』（5）
- 吳鎮柔ほか主編『中華人民共和國研究生工作教育和学位制度史』2001 北京理工大学
- 蕭放・賈琛 2019「70 年中国民俗学学科建設歷程、經驗与反思」『華中師範大学学報（人文社会科学版）』（58）
- 刑莉ほか著 2016『民俗学概論・新編』北京師範大学出版社
- 許鈺 1992「北師大民間文学教研室的昨天与今天」董曉萍編『鍾敬文教育及文化文存』
- 楊成志 1928「民俗学問題格」『民俗（週刊）』（1）
- 1942「民俗学之內容与分類」『民俗（季刊）』（4）
- 1988『楊成志民俗学記述与研究』高等教育出版社
- 楊堃 1932「介紹汪繼遇波的民俗学」『鞭策週刊』（13）
- 揚・哈羅德・布魯範德著、李揚訳 2011『新編美国民俗学概論』上海文芸出版社
- 2020『白頭鷹の隱形羽毛』北京三聯書店
- 楊哲編 1991『鍾敬文生平、思想及著作』河北教育出版社
- 楊知勇・秦家華・李子賢 1989「物質民俗：一個有待開拓的研究領域」『思想戰線』（5）
- 葉濤・吳存浩 2002『民俗学導論』山東教育出版社
- 意娜 2013『直觀造化之相：文化研究語境下的藏族唐卡藝術』社会科学文献出版社
- 尹紹亭 1996『雲南物質文化（農耕卷）』雲南教育出版社
- 苑利 2002『二十世紀中国民俗学經典・學術史卷』社会科学文献出版社
- 苑利・顧軍 2003『中国民俗学教程』光明日報出版社
- 張多 2021「基於文史傳統的交叉学科實踐：雲南大学民間文学・民俗学学科建設省思錄」『民間文化論壇』（6）
- 張麗君ほか訪談、於倩ほか訳 2012「美国民俗学領域物質文化研究的興起与現狀」『民俗研究』（4）
- 張曉麗・周曉傑 2020『黑龍江流域鄂倫春族樺樹皮芸術研究』中国社会科学出版社
- 張瑜 1986「民俗学的性質、範圍和方法」王文寶編『中国民俗学論文選』中国民間文芸出版社（初出 1934 年）
- 張紫晨 1985『中国民俗与民俗学』浙江人民出版社
- 趙厚憲 1985「民俗学簡介」『重慶師範学院学報（哲学社会科学版）』（3）
- 周星 2003「中国民俗研究的区域本位与事象本位」『中国民俗学会成立 20 周年學術研討会論文集』
- 鍾敬文 1943「編余綴話」『民俗（季刊）』（2）
- 鍾敬文主編 1980『民間文学概論』上海文芸出版社

- 1983『民俗学入門』序『民間文学』(5)
 1987「民俗学与民間文学」『新的駢程』中国民間文艺出版社
 1989「五四」时期民俗文化学的興起『北京師範大学学報』(3)
 1992「民俗文化学発凡」『北京師範大学学報』(5)
 1996『民俗文化学：梗概与興起』中華書局
 主編 1998『民俗学概論』上海文艺出版社
 2002「对中国当代民俗学一些問題的意見」『社会科学戰線』(1)
 2018『鍾敬文全集 28・第 15 卷 專題档案卷』高等教育出版社
 中央民族大学民族博物館編 2018『中国少数民族社会歷史調查上・下』学苑出版社

欧文 (アルファベット順)

- Abrahams, Roger D. 1993 After New Perspectives: Folklore Study in the Late Twentieth Century. *Western Folklore*. 52 (2/4).
- Ben-Amos, Dan. 1998 The Name Is the Thing. *The Journal of American Folklore*. 111: 257-280.
- Bennett, Gillian. 1996 The Thomsian Heritage in the Folklore Society (London). *Journal of Folklore Research*. 33 (3).
- Bronner, Simon J. (ed.) 1987 *Folklife Studies from the Gilded Age*. UMI Research Press.
 (ed.) 1992 *American Material Culture and Folklife: A prologue and Dialogue*. Utah State University Press.
- Brunvand, Jan Harold. 1978 *The Study of American Folklore: An Introduction*. W. W. Norton & Company.
- Camp, Charles. 1983 Developing a State Folklife Program. In Dorson, Richard M. (ed.), *Handbook of American Folklore*. pp. 518-524. Indiana University Press.
- Dorson, Richard M. 1965 Folklore and Folklife Studies in Great British and Ireland: Introduction. *Journal of the Folklore Institute*. 2 (3).
 1968 *The British Folklorists*. Routledge.
- Dundes, Alan. 1966 The American Concept of Folklore. *Journal of the Folklore Institute*. 3 (3).
- Erixon, Sigurd 1937 Introduction. *FOLKLIV* (1): 5-12.
 1962 Folk-life Research in Our Time. *Gwerin: A Half-Yearly Journal of Folk Life*. pp. 275-291.
- Glassie, Henry. 1999 *Material Culture*. Indiana University Press.
- Glassie, Henry and Truesdell, Barbara. 2008 A Life in the Field: Henry Glassie and the Study of Material Culture. *The Public Historian*, 30 (4): 59-87.
- Hering, Katharina. 2016 Palatines or Pennsylvania German Pioneers? The Development of Transatlantic Pennsylvania German Family and Migration History, 1890s-1966. *The Pennsylvania Magazine of History and Biography*. 140 (3): 305-334.
- Herskovits, Melville J. 1946 Folklore after a Hundred Years: A Problem in Redefinition. *The Journal of American Folklore*. 59 (232): 89-100.
- L. D. (Review). 1947 Folk-Liv. t. IX. *Le Mois d'Ethnographie française*. 6.
- Mitchell, Stephen A. 1986 Ethnologia Scandinavica: A Journal for Nordic Ethnology by Nils-Arvid Bringéus. *The Journal of American Folklore*. 99 (391): 89-91.
- Peate, Iorwerth C. 1963 The Society For Folk Life Studies. *Folk Life*. 1.
- Riedl, Norbert F. 1966 Folklore and the Study of Material Aspects of Folk Culture. *The Journal of American Folklore*. 79 (314): 557-563.
- Roberts, Warren E. 1988 *Viewpoints on Folklife: Looking at the Overlooked*. UMI Research Press.
- Sayce, R. U. 1956 Folk-Lore, Folk-Life, Ethnology. *Folklore*. 67 (2): 68-69.

- Thompson, Stith. 1961 Folklore Trends in Scandinavia. *The Journal of American Folklore*. 74 (294): 313-320.
- Vellinga, Marcel. 2011 The End of the Vernacular: Anthropology and the Architecture of the Other. *Etnofoor*. 23 (1): 171-192.
- Vermeulen, Han F. 2006 The German Invention of Völkerkunde. *The German Invention of Race*. pp. 123-146. State University of New York Press.
- Wright, A. R. 1927 Presidential Address: The Folklore of the Past and Present. *Folklore*. 38 (1): 13-39.
- Yoder, Don. 1963 The Folklife Studies Movement. *Pennsylvania Folklife*. 13 (3).
- 1976 Folklife Studies in American Scholarship. In Yoder, Don. (ed.), *American Folklife*. pp. 3-18. University of Texas Press.